

2 街路樹の歴史とこれから



渡辺 一夫
WATANABE Kazuo

森林インストラクター
農学博士

街のなかの樹として最も身近な存在である街路樹。人に植えられて人に管理されている街路樹は、「まちと樹の共生」の典型例といえる。街路樹はどのような経緯を辿って今のような姿をみせているのだろうか。また、これから街路樹とどのように付き合いがいけばよいのだろうか。

よく植えられている街路樹は

都市に住む人々にとって、街路樹はもともと身近にある樹木の一つだろう。実際、全国には700万本近い街路樹が植えられている。では、街路樹と聞くとどんな木を思い浮かべるだろうか。平成24(2012)年の国土交通省の統計によると、全国に植えられている街路樹(高木)で、最も本数が多いのがイチョウである。2位がサクラ類、3位がケヤキ、4位がハナミズキ、5位がトウカエデである。

街路樹には、枯れにくい強さ、美しさ、管理しやすさなどの条件が求められる。イチョウは大気汚染や剪定に対して強いこと、黄葉の美しさからここ数年1位を保ち続けてきた。2位のサクラ類は花がきれいであり、3位のケヤキは樹形が美しく頑健である、といった理由でよく植えられている。ただし、街路樹には気候や文化を反映した「地方色」がある。北海道では、寒冷な気候を反映してナナカマドが最も多く、アカエゾマツといった北海道ならではの針葉樹もよく植えられている。九州ではクロガネモチやクスノキといった常緑樹が目立つ。

街路樹のさきがけ

平安京に柳の並木が植えられたように、古くから街路樹は存在したが、近代都市の街路樹の歴史は明治に始まる。東京では、明治末になるとそれまで植えていた柳や桜を改め、近代都市にふさわしい街路樹を新たに選び、植栽する事業が始まった。その際に、林学者の白沢保美や園芸の専門家である福羽逸人らが国内外の樹木を検討し、イチョウを含む10種類の街路樹を選ん

だ(表1)。その多くが外来種であり、特にプラタナスやユリノキなど風格のある洋風の木は早くから試験的に植栽された。一方、ミズキ、トネリコ、アカメガシワなど日本でごく普通に自生する在来種も選ばれたが、これらは成育が悪かったこともあり、実際にはほとんど植えられなかった。こうして外来種を基本とする樹木の苗木が育てられ、日本の街路樹のさきがけとして東京の街路に植栽されていったのである。

街路樹の変遷

太平洋戦争中は空襲などで街路樹は減少するが、戦後、全国の街路樹の本数は増加の一途をたどる。しかし、その樹種をみると、使われる街路樹にも「はやりすたり」があり興味深い。時代の流れとともに、街路樹に対するニーズや評価が変化していることが伺える。

表2は昭和29(1954)年、昭和57(1982)年、平成24年の統計で、全国に植栽されている街路樹(高木)の樹種(上位10種)や本数を示している。約60年の間に全国の街路樹の総本数は20倍に増加しており、使われる樹種も年とともに多様になってきている。

樹種の変遷をみてみよう。イチョウやサクラ類は、昔も今も変わらずによく植えられている。一方、かつて上位

表1 明治の末に東京の街路樹として選定された樹種

イチョウ(外来種)	トウカエデ(外来種)
プラタナス(外来種)	エンジュ(外来種)
ユリノキ(外来種)	ミズキ(在来種)
アオギリ(外来種)	トネリコ(在来種)
トチノキ(在来種)	アカメガシワ(在来種)

表2 全国に植栽されている街路樹(高木)の本数の変化

昭和29(1954)年			
順位	樹種	本数	比率
1	プラタナス類	88,930	31%
2	イチョウ	59,854	21%
3	サクラ類	22,989	8%
4	エンジュ類	21,915	8%
5	ニセアカシア類	21,354	8%
6	外来ポプラ類	13,947	5%
7	アオギリ	11,440	4%
8	アカマツ・クロマツ類	7,412	3%
9	シンジュ	4,609	2%
10	ヤナギ類	4,459	2%
	その他	27,711	10%
	合計	284,620	100%
昭和57(1982)年			
順位	樹種	本数	比率
1	イチョウ	301,998	17%
2	プラタナス類	199,830	11%
3	トウカエデ	142,537	8%
4	ヤナギ類	91,426	5%
5	サクラ類	80,075	4%
6	ケヤキ	78,966	4%
7	ニセアカシア類	73,225	4%
8	クスノキ	67,001	4%
9	イブキ類	65,400	4%
10	外来ポプラ類	57,055	3%
	その他	622,292	35%
	合計	1,779,805	100%
平成24(2012)年			
順位	樹種	本数	比率
1	イチョウ	569,684	8%
2	サクラ類	522,353	8%
3	ケヤキ	487,051	7%
4	ハナミズキ	360,096	5%
5	トウカエデ	321,274	5%
6	クスノキ	276,146	4%
7	ナナカマド	196,431	3%
8	日本産カエデ類	183,148	3%
9	モミジバフウ	170,117	3%
10	プラタナス類	149,411	2%
	その他	3,514,099	52%
	合計	6,749,810	100%

にあった樹種で、今は下位に転落した木としては、プラタナス(写真1)、外来ポプラ類、シダレヤナギ(表2ではヤナギ類)、ニセアカシアなどがある。これらの樹木は、成長が速く剪定コストがかさむため、次第に植えられなくなったのである。また、根が浅く歩道の舗装を持ち上げたり、強風で倒れたりすることも敬遠されるようになった理由である。

一方で、ハナミズキは急激に増加した。これは、花や紅葉などの美しさもあるが、成長が遅いため剪定などの管理コストがそれほどかからないことが大きい。ケヤキは成長が速く剪定コストもかかるが、郷土種であり樹形



写真1 プラタナス並木(東京霞ヶ関)。風格があり大きな建物に似合うが、剪定コストがかさむため今ではあまり植えられなくなった

が美しいため、戦後とても増えた樹種である。ただし近年は同じケヤキでも、小型の品種が使われることもある。写真2はケヤキの小型タイプの品種(ムサシノ)である。竹箒を逆さにしたような樹形で、あまり大きくならず、省スペースで省コスト型のケヤキだ。

街路樹の歴史には多くの試行錯誤があった。気候、都市環境、病原菌、害虫などに対する適性や、社会のニーズに対する適性を試しながら街路樹は植えられてきた。その結果が現在の街路樹に生かされている。

生き物ならではの難しさ

街路樹は道路の付属施設である。そして、歩行者を強い日差しから守ったり、安らぎを与えたり、ドライバーの視線を誘導するなど、さまざまな役割を担う。しかし、鉄やコンクリートでできた施設と比べて、生き物である街路樹の管理には独特の難しさがある。それはどのようなものだろうか。

剪定

樹木は生きるために、枝を伸ばして成長しようとする。しかし、街路樹として利用するためには同じサイズに樹体を維持する必要がある。このため定期的に剪定を行うわけだが、剪定にはコストがかかる。そこでコストを下げるために剪定回数を減らして、ぼつりと刈り込む「強い剪定」がなされることがある(写真3)。こうなると、丸坊主になった姿が痛々しいし、日影も減ってしまう。剪定の手間が少ない小さなサイズの木へ植え替えることも増えているが、小型の木では大きな日影を作ることは



写真2 小型のケヤキの品種（ムサン）。省スペースで省コストのケヤキとして近年見かけるようになった



写真3 強く剪定されたプラタナス



写真4 ゴルフボール大のトチノキの実。落下して歩行者に当たらないように、実がなる前に剪定されることもある

難しい。

樹木は生きるために葉や種子をつける。特に落葉樹の場合、近隣の住民から落ち葉の掃除が大変だという苦情が出て、強く剪定されることがある。ゴルフボール大の実をつけるトチノキは、実が落下して歩行者に当たったり、車に当たって傷をつけたりするおそれがあるため、実が大きくなる前に強く剪定されることも多い（写真4）。生物の生きようとする力と矛盾する要求も、街路樹には求められる。このため、街路樹の管理にはさまざまなジレンマがつかまとう。

健康管理と更新

道路は樹木にとって生育しやすい環境とは言えない。根を思うように伸ばせない狭い空間（植え株）に植えられ、車の排気ガスを浴び、歩行者に根を踏みつけにされることもある。また街路樹は、病原菌や害虫の攻撃にも常にさらされている。樹木の病気には、クロマツやアカマツを枯らすマツノザイセンチュウ病（松枯れ）や、ホルトノキを急激に枯らすホルトノキ萎黄病のように、大量の木に壊滅的な被害を与える伝染病も存在する。

街路樹も生き物である以上、いつかは弱り、枯れて死

ぬ宿命を負っている。劣悪な環境や病気によって、衰弱する木が出てくれば、倒れたり枝が落下したりする危険が生じる。そこで、個々の街路樹の健康度のチェックを行い、枯れかけた枝を切り落としたり、倒れる危険のある木の伐採や更新が必要となる。街路樹には、きめ細かい世話が必要なのである。

また、街路樹の更新で難しいのが住民感情だ。鉄のガードレールの交換と異なり、生き物である木には住民の思い入れがある。このため、地域住民に長年親しまれてきた並木などでは、伐採に対する反発が起きることもある。

逸出

樹木は生きものだから子孫を残そうとする。そこで「逸出」が起こることがある。逸出とは、本来の自生地から遠く離れた場所に人為的に持ち込まれた生物が、野生化して繁殖する現象で、その土地の在来種を圧迫するなど生態系への影響が懸念されることがある。かつてよく街路樹として植えられたニセアカシア（北米原産）やシンジュ（中国原産）などは、逸出が問題となっている樹種であり、地域によっては逸出した個体を排除する方針の自治体もある。近畿地方でよく街路に植えられて

いるナンキンハゼ（中国原産）も逸出しやすい。今までにない目新しい樹種も街路樹には求められるだろうが、外来種の導入には逸出に対する注意も必要になる（写真5）。

これからの街路樹

全国の街路樹の本数は600万本を超えた。これからもその本数は増えるだろう。しかし、重要なのはその質である。植えられた街路樹が最大限の機能を発揮することが理想だろうが、それは容易ではない。街路樹は生き物だから育てるには手間と暇がかかる。また、街路樹の将来を考えるには時代のニーズを見通す必要がある。サクラ類は花がきれいだが、根が浅いために歩道の舗装を持ち上げる。高齢者が増えると転倒のリスクも増える。ケヤキは大きくなって日陰を作るが剪定コストがかかる。街路樹の本数が増えてくると、1本当たりの剪定コストは一層の削減を求められるだろう。タフなイチヨウは街路樹としては優秀な木だが、イチヨウが増えすぎれば画一的だと批判を受ける。

街路樹にはいろいろな能力が要求されるが、そのすべてを満たす万能な木はない。生き物は人間の思うとおりに育つわけではない。だから、街路樹を活かすためにはいろいろな樹種と、様子をみながらつきあっていく手間が要る。これからの街路樹事業にも手間暇をいとわない、樹木との地道なつきあひが必要だろう。



写真5 街路樹の親木のまわりに種子が散布され、芽生えたシンジュの稚樹。逸出の例である

<参考文献>

- 1) 『国土技術政策総合研究所資料第780号 わが国の街路樹Ⅶ』（2014）：国土交通省国土技術政策総合研究所編集・発行
- 2) 『わが国における街路樹種の近年の動向』（2001）：豊原穂か著、ランドスケープ研究64（5）